

旭川医科大学図書館

LIBRARY NEWS

No.55, Aug. 2016

特別号



特集：図書館開館時間短縮の“なぜ？”

この4月から図書館の特別利用は、午前1時から6時まで閉館することとなりました。このことについて、お問合せをいただきましたので、この特別号にてお知らせいたします。

“医学生の不養生”にならないために

旭川医科大学長 吉田晃敏



学長の吉田です。学生の皆さんが、勉強にクラブ活動その他に充実した日々を送っていることを、いつも頼もしく眺めています。

さて、私が久々にLibrary Newsに登場することとなりました。

今年度、本学図書館は、従来の24時間開館を大きく改め、全ての学生・教職員を対象に、毎日午前1時～6時を閉館時間帯としました。このことに対し、図書館には批判の声も寄せられていると聞きます。また先日は、私のところにも意見が寄せられました。

これを機に、この問題を改めて考えてみたいと思います。

今回の措置は、国の財政健全化政策に連動した、電気代などの経費節減が直接のきっかけでした。しかし、執行部が最終決断を下したときに最も重視したのは、学生の皆さんの健康です。医師や看護職者の卵である皆さんが不健康な状態に陥っては本末転倒です。

私が直接回答するよりも、適任者に回答してもらう方が良いでしょう。健康問題については保健管理センター長の川村教授にお願いし、そして、歴史学者でもある藤尾図書館長には、歴史的経緯を踏まえて今回の問題を語ってもらいました。ぜひ熟読してください。

図書館の大英断に拍手



旭川医科大学 保健管理センター長 教授 川村祐一郎

保健管理センター長の川村です。学生諸君の日ごろの勉学や課外活動への取り組み、ご苦労様です。

さて、当学図書館は今年度、全ての学生・教職員を対象に、毎日午前1時～6時を閉館としました。保健管理センター長の立場からすると、このことがもたらす最大のメリットは、諸君に例外なく、一日の基本的な生活サイクルをきちんと身につけてもらえる点であります。

点であります。

人間は昼行性の哺乳類です。すなわち、「日中活動し、夜は寝る」ということが基本の生物で、体内のホルモン分泌やホメオスタシスの維持など、すべてこの基本にのっとっています。ですから、生活の不規則、特に夜更かしが過ぎて日中眠るといった生活の不規則さが、心身のバランスのくずれ、作業能率や集中力の低下につながることは想像に難くありません。

昨年度以前の、図書館を諸君に終日開放していた頃の状況を思い起こしてみますと、一晩中起きていて図書館を利用した学生の中には授業中に眠っている者が少なくないといった指摘や、それとは逆に、夜間に図書館で寝泊まりしている学生が見受けられるといった指摘が、多くの教職員から寄せられておりました。後者のケースは図書館を宿舍代わりにしているようなものです。いずれのケースも、図書館の利用法として全く誤りであることはもとより、健康を配慮した生活と呼ぶことは到底不可能であると申せましょう。

(裏面へ)

誤解のないように申し添えますが、私は、諸君が夜間に勉強にいそむことを決して禁止したいわけではありません。自分の体力・気力などと相談して、無理のない範囲で行うならば大いに歓迎します。ただ、そういった生活の場はあくまでも、下宿なりアパートなりの自宅でありましょう。なお、ここで述べた「自分の体力・気力などと相談して」ということの意味の理解と実行は、極めて重要な事柄であるにもかかわらず、これが必ずしも諸君の身についてはいないなあ、という感想は、近年、私をはじめ、保健管理センターの医師・職員がとみにいただく所であります。

諸君は、いつ寝ていつ起きていますか。いろいろでしょうが、大きく分けて、夜型の人と朝型の人があります。いくら夜型で夜更かしの人でも、翌日の授業のことを考えるなら、遅くとも午前2時までには就寝するのが理想でしょう。そのためには、午前1時には帰宅しなければならないでしょう。こういうわけで、1時に閉館するのは合理性があります。

逆に、いくら朝型の人でも、起きるのは早くも4時でしょう。それから支度をして大学へ向かえば5時です。しかし、この時間帯は1日のうちで最も気温が低く、まして寒い冬場ではマイナス10度以下。こんな悪条件の中を敢えて通学する学生はそう多くないはずで、6時に開館すれば、たとえ何か差し迫った調べものがあったとしても、1講目が始まるまでには2時間半もあります。充分でしょう。こういうわけで、朝6時までには閉館、というのも合理性があります（ほかに、授業が終わってすぐに帰宅し、午後6時ごろまでには就寝し、日付が変わって間もなく起床する、という人も稀にはいるかもしれませんが、こういう人はクラブ活動もアルバイトもしていない人でしょう。一般的ではありませんから、無視してよいでしょう）。

いずれにせよ、心身の健康という観点から、図書館の24時間開館は好ましくないと私は考えます。今年度、図書館が夜間に閉館時間を設けたのは、図書館長はじめ関係各位の大英断であったと私は歓迎しています。これを機に、学生諸君全員が基本的な生活習慣を身につけることを、保健管理センター長として切に願う次第であります。

開館時間 延長・短縮の歴史を振り返る

旭川医科大学 図書館長 藤尾 均



図書館長として最初に確認しておきたいのは、図書館は、文字通り、備え付けの図書資料（単行本や雑誌）を利用して調べものをする場であって、単なる自習室ではなく、まして宿泊施設ではない、という点です。以下の私の文章は、このことを大前提にしています。

歴史的経緯をお話しましょう。本学の図書館で24時間開館が始まったのは、今から10年以上も前の八竹直（やちく・すなお）学長・小川勝洋図書館長の時代でした。当時は国立大学が法人化される前後の時期で、各大学が独自色を競い合って宣伝し始めた時代でした。図書館も特色を発揮し始め、平日だけの、しかも、せいぜい9時までだった開館時間を、利用者の利便性に配慮して延長することが競われました。そんな時期でも、本学のような24時間開館は極めて珍しいものでした。しかもこれは、当初は学生ではなく、多忙な研究者の利便性に配慮した措置だったのです。

やがて、どうせなら研究者だけでなく学生にも夜間開放しよう、との機運が高まり、取りあえず、国試を控えた高学年を対象に実施しました。それをやがて、徐々に低学年にも広げてきたというわけです。

しかし、現在では、研究者の図書利用環境は格段に向上し、図書館に足を運ばなくても研究室や自宅で専門ジャーナルを読めるようになりました。また、国試を控えた学生でも、ほとんどが午前1時までには図書館を辞去していることが、入退館状況の分析調査からわかってきました。逆に、低学年の場合は、いわゆる「お子さま」が増えてきたためか、利用モラルの低下が深刻となり、清掃代などが図書館経費を圧迫する事態も生じてきました。通算54回発行してきたLibrary Newsに館長・スタッフが載せた警告だけでも16回に及びます。殊に南棟のオープン後では、発行された23号のうち実に14回も掲載される事態となっています。

ここ数年、北大をはじめ他大学でも、以上のような理由から開館時間の短縮を図るところが増えてきました。今年度は本学も、学生の利用状況、他大学の開館状況、必要経費（電気代・冷暖房費・清掃代その他）、そして学生の精神衛生を総合的に勘案して、毎夜、閉館時間帯を設けたという次第です。

閉館時間帯を設けると、今後、学生の勉強意欲は低下してくる、などという無責任な予測をする学生がいます。それは杞憂であると、事実にもとづいて反論しておきましょう。平成26年度後半には、改修工事のため図書館は昼も夜もほとんど利用できない状態でしたが、年度末における本学学生の国試合格率は、例年になく高いものでした。

なお、本学の規程では開館・閉館時間の決定は図書館長の権限ですが、今回の措置は決して私の独断で決めたわけではありません。館長を議長とする図書館委員会、学長を議長とする大学運営会議および教育研究評議会、外部有識者（弁護士・公認会計士・医師など）も参加する役員会・経営協議会でも慎重に審議していただいた結論です。

以上の説明に何か質問・意見はありますか。学生諸君による、「情」に訴えるのではなく「理」に訴える意見・反論なら大歓迎です。